

ヒルデブラント・コンソートによるバッハの新たなミサ

－ワルターズハウゼンにて－

ワルターズハウゼンにて行われた「チューリングェン・バッハフェスティバル」。

復活祭の月曜日に、聴衆はベルギーのグループによるパフォーマンスに身をゆだねた。

2019年4月24日 午後2時35分



アルトのパートを歌うロブ・クッペンス 写真：ディーテル アルブレヒト

ワルターズハウゼンにはバッハがまだしっかりと息づいている。バッハは通常「クロスオーバー」なるアレンジの手にかかっても、クロスオーバーを施した現代のマスクの下でもバッハ自身として生き残っている。ルターの言葉を借りていうならば「それ以外にはなりえない」のである。

しかしながら今回は違っていた。単なるアレンジでもなければクロスオーバーでもない。そしてバッハの原曲でもない。だがそこにはバッハの音楽性が十分に活きた、全く純粋なバッハが確固と存在しているのである。この芸術作品は素晴らしいオルガニストであり指揮者であるワウター・ドゥコーニク、そして国際的に名を馳せた名手のグループである彼のオーケストラ、ヒルデブラント・コンソート (※1) によってこの世に生み出された。バッハの時代の慣習に基づいた演奏スタイルを貫く6人の歌手とバロック・オーケストラである。

ドゥコーニク氏が用いたのは1739年に出版されたバッハの「クラヴィーア練習曲第3番 (通称「オルガンミサ」と呼ばれる)」で、この曲集はオルガンの様々なスタイルがちりばめられていることで有名である。ドゥコーニク氏はプレリユード、フーガ、コラールをアレンジし、さらにそこにルターのコラールを加え、歌とオーケストラのための音楽へと作り変えた。その結果が「ルターとバッハに捧げる大ミサ (1739)」である。

曲の冒頭を飾ったのはプレリュード変ホ長調 BWV552 (※2)で、ドゥコーニク氏はこの壮大な「トロースト・オルガン」(注:演奏した教会のオルガン名)からフルに光り輝くダイナミックなサウンドを創り上げて空間にとどろかせた。

オーケストラはバロックのスタイルで演奏するだけでなく、バロック時代の楽器か、もしくはそれを模したものによって演奏され、聴衆はヴィオラ・ダ・ガンバやヴィオラ・ダ・モーレ (※3)、オーボエ・ダ・カッチャ (イングリッシュ・ホルンの前身) (※4)などの楽器を目と耳で聴き楽しんだ。

歌手はソジョン・イム (ソプラノ1)、バルバラ・ソメルス (ソプラノ2)、ロブ・クッペンス (アルト)、アドリアン・ドゥ・コスター (テノール)、エリック・ファン・ネーヴェル (バス1) マシュー・ザドウ (バス2)。6つの声部はヴィブラートを完全に控え、クリアでピュア、そして直線的でありながらも強弱が細やかに表現された音作りをし、最初から最後に至るまでそれは調和の極みであった。最初のキリエ (※5)からソリストたちは完璧に完成された美を映し出した - 滑らかに流れ蛇行するポリフォニーのラインを表現することによって - 一方エネルギーで活気を持ったポリフォニーは「法」の部分(聖なる信条)やクレドの冒頭で際立ったコントラストを生み出した。原曲が器楽(オルガン)であるものを編曲しているわけだから、歌手は非常に高度なコロラトゥーラのテクニックを持ってヴィルトゥオーソ性のあるパッセージを歌うことが求められる。そしてそれらはなんと素晴らしかったことか! 最終曲の「聖なる父」を含め....

2時間余りの大きな充足感と深い霊的な集中の後「大ミサ」は幕を閉じ、観客は興奮冷めやらぬまま足を踏み鳴らしてこのヒルデブラント・コンソートに喝采を送り、称賛の意を示した。それに応えるべく最終曲の「聖なる父」がアンコールとして演奏され、この演奏会の締めくくりとされた。

このコンサートの録音は、4月30日火曜日午後8時15分、ドイツ国営放送 MDR Kultur と MDR Klassik によって放送される。

ディーテル アルブレヒト 2019年4月24日

訳・中丸まどか

※1-5は編集子のリマーク

※1 当ホームページ 「Home」 ページに部分が収録してあります

※2 当ホームページ 「Wouter Collection」 ページに部分が収録してあります)

※3 当ホームページ 「Contacu us」 ページに部分が収録してあります

※4 当ホームページ 「Gallery」 ページに部分が収録してあります

※5 当ホームページ 「What's NEW」 ページに部分が収録してあります

転載不可